

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

Mar. 2016 No.

50



関東学院大学の10年後の姿を示す 「未来ビジョン」が動き出しました。

2014年10月に基本方針が示された「未来ビジョン」が、2016年から正式に動き出しました。この先10年間のロードマップと、2016年度に着手する施策に関する具体的な進行プランも発表されています。そこで、規矩大義学長に、これから「未来ビジョン」を推し進めてゆくうえでの思いをうかがいました。



関東学院大学 学長

規矩 大義

九州工業大学大学院博士後期課程修了
2002年、関東学院大学工学部に着任
2013年12月、学長就任

緩やかな形で、 しかし着実に進めたい 「未来ビジョン」

「未来ビジョン」は2014年に、「教育」、「研究」、「社会連携」、「かたち」の4つのカテゴリーごとに目指すビジョンと、そのビジョンの骨格となる基本戦略を定めました。2015年、パブリックコメントや政策レビュー等による広報・公聴を経て、大きな理念であるビジョンと、ビジョンを具体化したあるべき姿とも言える基本戦略に対して、それを実現するための50の施策を決めて頂きました。そして、それぞれの施策が実現に至るまでのタイムテーブル、いわゆるロードマップを策定し、2016年、いよいよ始動します。

未来ビジョンにある50の施策は、比較的早期に実現が期待されるものから、早急に取り組まなければならぬもの、相当な準備を経て着手すべきものまで、その規模、重み、位置づけもさまざまです。また、まだまだ細部を詰める必要のあるものも含まれています。従って2016年度は、「我々は今、何ができるか」、「今、何から始めなければならないか」という観点から、大学として6個（法人では15個）の施策を選び、着手することになりました。これ

らの施策については、詳細なロードマップと予算計画をもとにした具体的な作業が始まろうとしています。今後、年次を重ねるにつれて、段階的に全ての施策に着手し、10年後に関東学院が理想の姿に近づきよう、穏やかですが着実な歩みを進めてゆきたいと考えています。

「未来ビジョン」は10年後の関東学院大学の「理想像」を描いています。それは今、考えうる「理想像」です。勿論、これからの社会や大学を取り巻く環境がどのように変化したとしても「未来ビジョン」で掲げた理念が大きく変わることはあつてはなりません。しかし、個々の目標や施策の内容は社会の変化に合わせて変わり得るものですし、むしろ環境の変化を捉えて、理想に到達する方法と道筋を柔軟に選択できなければ、理想は絵に描いた餅になってしまうと思っています。私達のゴールは大きな目標を確実に実現することであり、50の施策の一つひとつを順番に達成することではありません。50の施策が実行されれば、理想の大学を手中に出来ることも考えていません。4つのビジョンと基本戦略の底流にある思想、そして、50の施策とそれを実行するための具体的な作業から見えてくる大学としての意思やベクトルこそが、関東学院大学を学生本位の理想の姿へと導いてくれることを願っています。

未来ビジョンの施策は プロジェクトなのか

関東学院大学のあるべき姿を示した「未来ビジョン」の策定とその推進は、学校法人関東学院にとっても、関東学院大学にとっても、とても大きな事業で、まさに本学の近未来を左右する一大プロジェクトと言えるものです。このプロジェクト全体に割かれる人的資源、物的資源と資金は相当なものになるでしょうし、上手く回り始めれば大きなモーメントとなつて、きつと更なる好循環を生み出すことでしょう。一方で、手綱が切れてしまえば、大きな遠心力によって予想もしない方向に飛んでいくかもしれません。だからこそ、回転にぶれはないか、その方向は理想に向つているのか、誤差は許容範囲に収まっているのか、といったことをチェックすることが重要です。モーメントが大きいからこそ、こまめに、小さな補正を施しておかないと、大きなずれが生じてから軌道修正するのは、始動するときと変わらないような大きなエネルギーを必要とします。動き始めたばかりのプロジェクトに水を差すつもりは毛頭ありませんが、組織を預かる者として決して忘れてはいけないことだと思っています。

一方で、ビジョンを構成する50の施策には具体的な作業内容が示されているものも少なくありません。重要度や実現可能性、現状との乖離、費用対効果などの点から、各項目のレベルはかなりの差がありますが、日頃の教育、研究や業務と深く関わっているものがほとんどです。プロジェクトベースの計画が進められています。プロジェクトの教職員にとつてプラスアルファの業務だったりと、特別なチームで特別な作

業を行うものばかりではなく、予算すら分けて考えることが難しいものもあります。むしろ、全ての教職員、全ての部署が「未来ビジョン」に深く関わるのだということをご自分で改めて確認したいと思っています。

一般企業であれば、10年後に何かを為すに決めたなら、毎年の事業計画のなかに確実に織り込み、進捗を管理しながら成功へと導くはずですが、大学は、本務である教育と研究が日常です。目の前には学生がいて、彼らにとつて学生時代は今しかないのです。10年後の成果を享受するのは目の前の学生ではありません。在学生にとつては、今、大学は自分に何をしてくれるのが重要で、そのためには「未来ビジョン」に掲げた一つひとつの思いが、明日の大学に少しでも反映されることを願っています。「9年間は我慢して10年目に花開きました」ではダメなです。学生や教職員が「去年に比べて大学は良くなった」と気付いてくれたら、それは大きな目標に近づいている証だと思えます。

校訓

「人になれ 奉仕せよ」のもとで

未来ビジョンの施策を実現するプロセスにおいても、「人になれ 奉仕せよ」の教えを大切にしなければなりません。私には「奉仕せよ」の解釈を論じる資格はありませんが、私なりに「人になれ 奉仕せよ」は奉仕できる人になれ、という意味だと考えました。「人になれ」は人格者になれという意味もあるのかもしれませんが、どのような状況のなかでも奉仕できる人になれるように、学び続けなさいという意味だと解しています。学び続けているからこそ、必要とさ

れる時に社会に貢献できる、そうした人になつてください。それが校訓の教育の面での本質的な意味ではないかと思っています。大学もまた、いかにあるべきかを問い続けるべき存在です。10年後の姿を描いて、そこに向つて邁進するだけではなく、10年後のあるべき姿を示す「未来ビジョン」達成のためには、目の前の学生をよく見て、彼らにとつて良いことは何か、彼らが望むことは何かをしつかり掴むこと、その努力を継続すること、大学として学び

続けることが重要なのです。10年後、社会はどのように変化しているか、誰にも確証はありません。だからこそ、「未来ビジョン」達成への道筋は、少しずつ変化に対応できる、緩やかな枠組の中で考える必要があります。学生とここで働く教職員が、関東学院大学に誇りを持つる形を作り出せるかどうか、最終的な目標を見失わなければ、柔軟に対応することは変節ではないのです。

関東学院将来構想「未来ビジョン」(大学編)

校訓 「人になれ 奉仕せよ」

関東学院 「グランドデザイン」

関東学院大学の目指す10年後の大学像： 「建学の精神に基づき、これからの共生社会の創造と持続的発展に貢献する大学」

ビジョンI(教育)	ビジョンII(研究)	ビジョンIII(社会連携)	ビジョンIV(かたち)
国際化する共生社会の持続的発展に貢献する人材の育成	地域を拠点に、社会と連携した独自の研究の推進	「人と社会に貢献する大学」としてのアイデンティティの確立	未来の教育・研究活動を支える環境の整備
基本戦略	基本戦略	基本戦略	基本戦略
1. 次代に向けた関東学院大学ならではの教育を実現する教育体制の構築	1. 関東学院大学独自の独自の研究拠点の形成	1. 地域のニーズに応える大学の「知」の還元	1. キリスト教の精神に基づく大学としての特性の堅持・発展・進化
2. 建学の精神に基づく全学的リベラルアーツ教育「関東学院スタンダード」の確立	2. 研究力向上と研究成果の発信力強化	2. 地域に溶け込み、地域とともに成長し、地域から期待される大学づくり	2. 多様な人々が集い、交わる多文化共生・滞在型キャンパスの創出
3. 横浜から世界へ発信し、世界から横浜へ受け入れる国際化教育の展開	3. 教員と大学院生との「研究パートナー」としての関係の確立	3. 卒業生と学生、大学の共助関係の強化	3. 学院・大学の進化を支える経営体制の構築
4. 高校から大学へ、そして社会への連携と接続を重視した教育の推進			4. 財務基盤の強化
5. 学生の大学活動への積極的参画の促進による成長支援			

関東学院として、10年後を考える未来ビジョンに 取り組む意義について

関東学院大学では未来ビジョンの構想がまとまり、現在アクション・プランへの作業が進んでいます。こども園から中学・高校各校でも、未来ビジョン策定へと動き出そうとしています。関東学院として未来ビジョンへどのように取り組もうとしているのかを小河陽学院長にうかがいました。

関東学院 学院長
小川 陽

宗教学博士（仏・ストラスブール第二大学）
2010年に関東学院大学経済学部教授として着任
2014年関東学院 学院長



10年先の社会を見据えた 教育改革の必要性

関東学院の2つのこども園、2つの小学校、2つの中学・高校の10年後を考える未来ビジョンの第一次案策定は、予定より1年間延びてしまいました。先生方との話し合いの中で、今の社会の変化に対しての対症療法的な改革案ではなく、抜本的な改革を考える必要性を求める声があったためです。

大学が策定した未来ビジョンは、10年以上先の未来を見据えて、改革の構想を練ることが主な目的です。社会が急激な早さで変化・進展している今、私たちはこれからの教育を見据えながら、未来への構想を練らなくてはなりません。本来、教育の目的とは社会に要請される良き市民、そのための基礎的な知識と能力を備えた人間を育てることにあります。しかし、これまでの社会が基礎教育に求めていた人間教育がそのまま10年後も続くとは限りません。そこで10年後、あるいはその先を見据えた教育の改革がどうしても必要だという思いがあるわけです。科学や情報技術の進歩によって、人間関係や

家族のあり方まで変わってきています。現実的には少子化が進む中で、今後関東学院がいかにか魅力的な学校であるかを訴えていくことが重要になってきています。

「変えること」が 目的の改革であつてはならない

関東学院の校訓である「人になれ 奉仕せよ」というキリスト教の精神は、自己の利益を追求するだけではなく、他者のために働ける人間形成を意識したものです。そのためには自分自身の精神的な自立が必要です。校訓によって培われる生徒たちの自立性や協調性は、まさに今社会が必要としていることです。そこで、関東学院のこうした特徴を学外に見える形、理解される形でいかに示していくか。それが今最も大事なことだと考えています。

そこで関東学院では、10年後に各校で指導者になる年代の先生方に分科会を、現在校長など指導的地位にある人たちにワーキンググループや改革推進会議を作つていただき、実現可能な改革を考えていこうとしています。

変わることにない建学の精神

これから関東学院の今後10年を考える未来ビジョンがいろいろな形で提示されていきます。

教育現場での改革で忘れてならないことは、本来変えなくても良い、むしろ変えてはならないことまで変えてしまう危険性です。改革の目的は「変えること」であつてはなりません。私立学校の場合はそれぞれの建学の精神こそが、存在意味そのものであり、変えてはならないものです。建学の理念や原点を忘れずに、常に社会の変化に対応しながら、この変化する社会の中で、理念が私たちにどのように変わることを促しているかバランスを取りながら考えていく。これこそ教育者に必要なことだろうと考えています。

10年、15年後を正確に予測することは誰にもできませんが、だからこそ、基本的な考える力、自立できる力をつけ、変化への対応力を育てることが必要です。知識を詰め込むだけではなく、その知識をどのように生かすことができるのかを念頭に置いた教育が必要だと考えています。

変わることにない建学の精神

これから関東学院の今後10年を考える未来ビジョンがいろいろな形で提示されていきます。

2017年4月に完成する3号館で、 地域に開かれた大学像を示します

2017年4月、法学部が湘南・小田原キャンパスから横浜・金沢八景キャンパスへと修学地を変更することが決まり、新棟の建設が進められています。金沢八景キャンパスに新築される新棟について、その目的と特徴、活用方法などを施設担当の渡邊慎介常務理事にうかがいました。



関東学院 常務理事（財務・施設担当）
渡邊 慎介

横浜国立大学大学院工学研究科修了
2003年横浜国立大学副学長（兼務）
2012年学校法人関東学院常務理事



3号館完成予想図

フロアごとに 明確な目的を持たせて

新棟は法学部修学地変更に伴う学生の増加のために新築されますが、法学部の学生だけのものではなく、他の学部の学生も利用できるオープンな性格を持っています。そのため、3号館と呼ぶことになりました。高さや明るさを感じられるデザインを採用し、5階まで吹き抜けにして、天井部分から太陽光がたっぷり入るようにしました。外から中が見えるように通路側をガラス張りにするなど、開放的な雰囲気や前面に出しています。

スペースと食堂、レストランがあります。食堂は学生が食事する場所ですが、食事時間以外も自由に入出入りしてディスカッションする場として使うこともできます。最初の構想では食堂の他にカフェが入る予定でしたが、現段階ではレストランが入る予定です。

2階は教室です。新しい建物をつくるにあたり、キャンパス全体で空地率25%を確保する必要が生じ、7号館の一部を取り壊すことになりました。そのために教室の絶対数が足りなくなり、移転してくる法学部の学生のためだけでなく、他の学部生も使うための教室を2階につくりま

4階には会議室とゼミ室、最上階の5階には教員の研究室を置くことにしています。

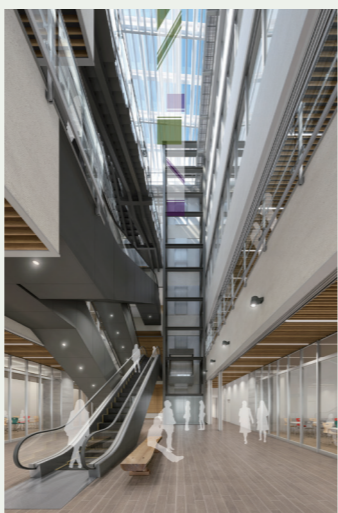
吹き抜けの一部になっているエスカレーターはあえて3階止まりにしています。エスカレーターの可動音が響いてしまうため、静かな4、5階へは階段かエレベーターを使つていただきます。音に関しては、下の音が上つてこないように、音を遮蔽する工夫をしています。

大学の社会貢献の場 としての期待

3号館は正門から入ってすぐ、外からいらした人にもわかりやすい場所にあります。手前にレストラン、奥に食堂を配置したのは、外部の方にも気軽にレストランを利用していただきたいという思いからです。

かつて大学の使命は教育と研究でしたが、今は社会貢献も大切な使命の一つです。大学における社会貢献とは、教育と研究を通して社会に貢献するということですが、地域の方々の繋がりを強める、広めることも、大学ができる社会貢献の一つの形と考えています。今後の構想としては、金沢八景の発展のために活動されている地域の皆さんが会合を開くための部屋を大学が提供することといったことも考えています。キャンパスを開放することは、社会貢献の

新棟吹抜け



一環として意味のあることです。地域との結びつきを強める活動は、地域のためだけではなく、学生の教育にも役立ちます。学生が社会に出る前に、社会に触れる良いチャンスです。地域が抱える問題に触れることで、自分が勉強してきたことが問題解決のためにどのように活用できるのかを考えることができます。答えが見つからなければ、自分の実力不足がわかり、これから学ばなければならない部分に気付くことができます。それは次の学びへのモチベーションになるのです。

新しい3号館は学びの場としてだけでなく、学生同士や学生や教職員と地域の皆さんとの交流の場としても活用していただければと思っています。

それぞれの展望

2017年4月、関東学院大学に新しい学部と学科が誕生する予定です。法学部に創設される地域創生学科、新学部として誕生する経営学部について、それぞれの学部長に開設の目的と将来への期待をうかがいました。

法学部の特長を生かした地域創生学科はこれからの社会が求める学問です。

2017年4月、横浜・金沢八景キャンパスへと修学地を変更する法学部に新しい学科として、地域創生学科が開設されます。地域創生学科とはどのようなことを学ぶ学科なのか、また法学部との親和性について、法学部学部長の村上裕教授にうかがいました。

法学部に地域創生学科を開設する理由とは

法学部は、大学の中で最も伝統的で保守的なスタイルの学部です。しかし、社会の要請や時代の流れには対応しなくてはなりません。大学として社会に貢献できる多様な人材を育成する役目もあります。そこで伝統的なスタイルの学問は既存の法学科で堅持しつつ、時代の要請に合わせた新しい学科をつくって対応させていこうと考えたのです。それが地域創生学科です。身近に接点を持つ地域社会を考えることで、これからの社会に貢献できる人材を育成できると考えています。

新学科開設のもう一つの理由は大学全体の動きです。学部は大学の一部ですから、大学の動きと連動していきたい。現在、関東学院大学は地域社会に開かれた大学として、地域連携や社会連携を深めています。その動きとともに法学部として地域社会の問題を考えようとしているのです。

例えば地域社会が抱える問題の一つに災害があります。災害が起きたときに最前線で戦うのは地域です。そこで、東日本大震災時に防災等に関わった方を専任講師として招き、現場は実際にどのように対処していったのかを話していただきます。他にも、地方自治体で活躍されてきた方、実際に地域の安全に関わってきた方など、現職の方々をお招きします。また、海上安全の問題も考えます。

でも法学部なので、ベースにあるのは法学です。法学をきちんと学んだ上で、地域の活性化にどのように生かしていくかを考えてもらいたいと思っています。

関東学院大学 法学部学部長

村上 裕

一橋大学大学院法学研究科博士後期課程満期退学
1990年関東学院大学法学部に着任
2014年関東学院大学 法学部学部長



大学のある神奈川県は、日本が地域で抱えるさまざまな問題を内包している地域と言えます。都市部もありますが、郊外には農業や漁業で生計を立てる場所もあります。アメリカ軍の基地もかなり大規模なものがあります。こうした生きた教材を我々は身近なところに持っているのです。それを教員が掘り起こし、研究や教育のテーマとして設定し取り入れて、自分たちの住んでいる地域の問題として学生に考えさせたいと考えています。

大きな特色を持っているのが「地方創生特論」という科目で、10項目ほどの授業を用意する予定です。自治体の市長・町長さんたちを講師に迎え、自治体の現場で何が起きているのかを語っていただきます。この学科のもう一つの特徴は教室の外に飛び出すフィールドワークを重視している事です。

法学部だからこそ学べる地域の問題

地域創生学科といえども、あくま

実践的な学びを通して経営学を肌で感じ、社会に貢献できる人材を育てます。

現在の経済学部とは別に、新たに経営学部が創設されることが決まりました。新学部開設の背景や具体的な授業内容を辻聖二教授にうかがいました。

経済学部とは異なる視点で社会を考える

経営学は企業や商品、サービスといった、学生にとって捉えやすい身近な問題をテーマとした学問です。経済学は、企業、家計、政府といっ

た経済主体の相互作用を研究対象にする学問ですが、経営学は、企業・組織・人間などのひとつの経済主体の活動や行動そのものが研究対象となります。

昨今のグローバル化の流れやICTの発展、人口減少など、社会構造の大きな転換点を迎えている中で、これからの企業、あるいは社会を担う人材を育成するために、時代性を踏まえたあらたな教育のかたちを目指し、経営学部を開設することにしました。

経営学の学びの中で、これからの社会や仕事のあり方が変わっても、自信をもって社会で活躍できる学生を育てて行きたいと考えています。

グループワークでの実践的な授業

経営学部の授業は、実践的、能動的な方向で進めていきます。1年生からグループワークでビジネスプランを作成し、発表してもらいます。まだ1年生なので、作成したビジネ

スプランは不完全なものかもしれませんが、この部分をもう少し調べなくてはいいけない、専門的な知識を補わないとプラン実現は難しいといったことに気付くのです。ビジネスプランを作るという実践的な授業が、気付きや探求する面白さを知るきっかけになればと思っています。

これまでも神奈川県中小企業家同友会の方に、会社の業務内容、立ち上げ時や成長するプロセスでの苦労話、生き残り戦略などを話していただきました。今後も実践系のビジネス科目を中心に、旅行、広告、金融、流通、電機業界等で社会経験豊富な方に講義をしていただきます。さらに、10社前後のサポーター企業ネットワーク「Kirbyz」をつくり、ビジネスの現場の視点から、ビジネスプランの課題設定や評価、ゲスト講師など、実際の授業での連携だけでなく、地元の高校教員と共にアドバイザリーボード（顧問委員会）に参画いただき、これからの時代にお

ける教育のあり方、人材育成像について議論し、一緒につくっていききたいと考えています。

社会に貢献できる人材を育てる

ビジネスプランにグループ単位で取り組む意味も、共同してつくるところを経験し、学ぶことにあります。一方通行の講義形式や卒業論文を書くだけでは、自分のベースだけで進む人間になってしまいます。組織では学力だけではなく、それぞれの学生たちの人間性やリーダーシップ、協調性などの人間力が試されます。経営学は実践的な学問ですが、就職のためだけに学ぶわけではなく、何ができるのかを学んでほしいと思います。自分に与えられた仕事だけでなく、組織として力を発揮できないければ社会人としては失格です。経営学部で学ぶことで、社会に果たす役割への意識を高く持つてほしいと思います。

関東学院大学 経営学部学部長(就任予定)

辻 聖二

九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了
1995年関東学院大学経済学部に着任
2017年4月より経営学部学部長 就任予定



スポーツを基軸に在学生や卒業生、地域の人と一体感が持てる大学の形をつくりたい

関東学院ではこのほど、アメリカのスポーツ用品メーカー、アンダーアーマーとのパートナーシップについて、またこれから始まるスポーツを軸とした学校運営の構想を小山巖也大学副学長にうかがいました。



発想のきっかけは スポーツマネジメント 先進国アメリカでの視察

12、3年前にアメリカのオハイオ州立大学へ視察に行ったことがあります。驚くことに、この大学は10万人収容できる大スタジアムを持っています。週末に学生が出場するアメリカンフットボールの試合などには、地元の市民やファンが大勢観戦にやっつけてきて、大きなスタジアムが満員になります。大学の学生や卒業生と一緒に、地元の市民の皆さんが応援していました。そして、購買部ではTシャツなどの大学オリジナルのグッズを販売しています。UCLAでも一流スポーツ用品メーカーが作った大学のオリジナルグッズを販売していました。これは全てを大学が管理して、ブランドイングしている良い例です。日本の大学ではまだこうした動きがなく、早い時期にこうしたシステムをつくりたいと考えるようになりました。

関東学院大学のラグビー部がアンダーアーマーに供給を受けている縁で、アンダーアーマーに日本総代理店と意見交換をしました。彼らには日本のスポーツ界のありようを変えたいと

の思いがあります。また、アメリカの大学が行っているスポーツビジネスを日本にも導入したいと考えており、基本的な思いは共通のものでした。

アンダーアーマーと意見の一致をみて、このたび大学だけではなく、関東学院全体でパートナーシップを組むことになりました。ウェアなども関東学院としての統一感を出すことができると考え、学校全体として面白い取り組みができると考えたからです。通常スポーツメーカーとのタイアップはそのほとんどがチーム単位です。アンダーアーマーも大学や高校のクラブとのタイアップ経験はあっても、関東学院のような学校全体とのタイアップは初めての試みのようでした。

スポーツを通して、 開かれた大学を目指す

スポーツには人をつなぐ力があります。大学でのスポーツクラブ活動には、協調性や人間力を養う教育的な意味があります。選手同士は連帯感で結ばれ、他者を敬う心が生まれます。先輩後輩の縦の関係や、同期同士の横の関係は、

用する大学にできればと思っています。これらの大学は在学生だけの場ではなく、卒業生にも地域の方々にも愛され、その活躍を応援して

もらえる場でありたい。スポーツを素材として、新しい大学の姿を構築していきたいと考えています。

大学卒業後も続く、大切な絆です。

スポーツを通して大学と地域の方々との一体感を高めていくこともできると考えています。年に数回、運動部の部員が参加して子どもたちや近隣の方々にスポーツの楽しさを体験していただくスポーツフェスティバルや走り方教室などを開催しています。さまざまな大会で関東学院の運動部の部員が活躍することも大切です。在学生や卒業生、学校の近隣にお住まいの方々の応援があれば、選手はより頑張れます。好成績を残したことで、「関東学院の学生、卒業生であることが誇らしい」「関東学院を応援することでスポーツの楽しさがわかって良かった」と思ってくださいれば、学生にとっても、大学にとってもこれ以上嬉しいことはありません。

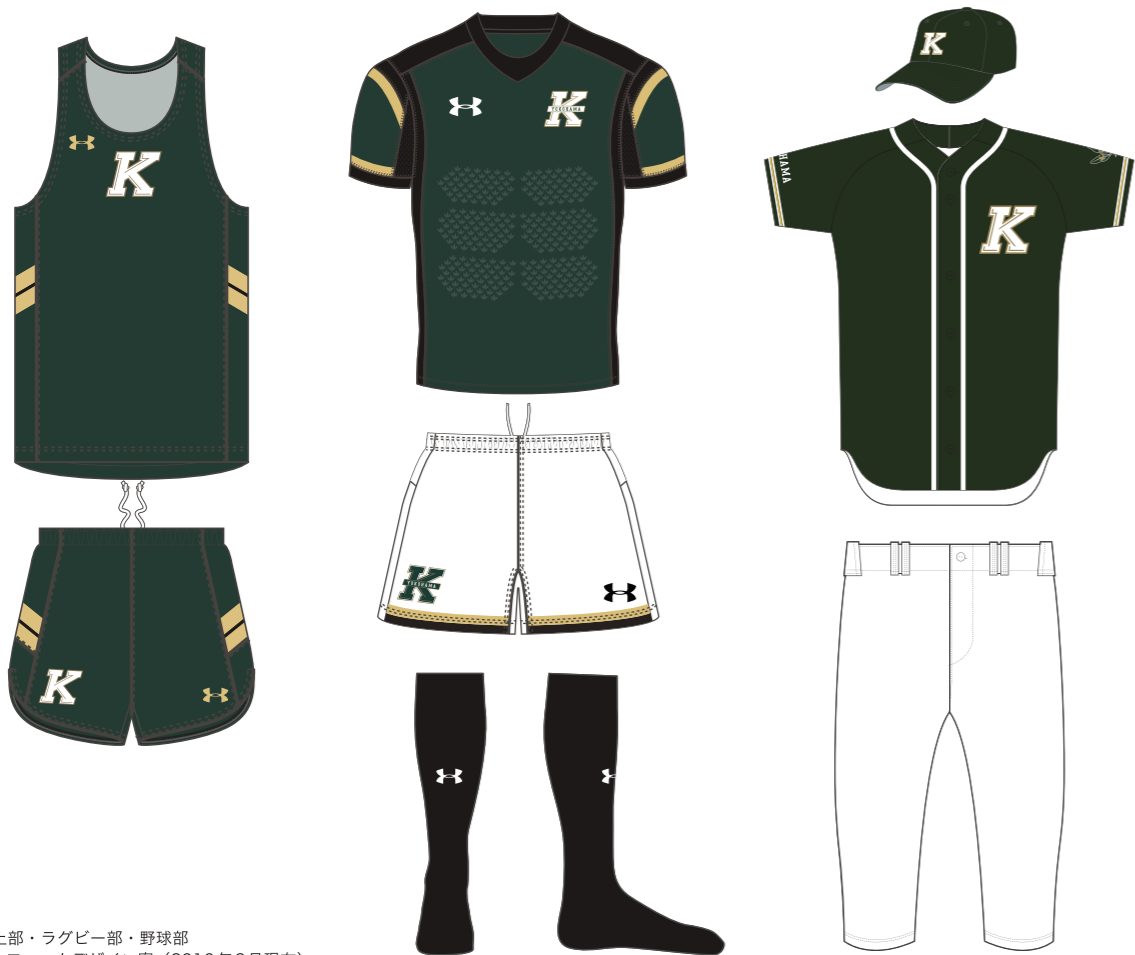
アンダーアーマーとタッグを組んで始まる動きの中で、関東学院のスポーツのロゴ、Kマークを作りました。2016年4月から順次、Kマークを入れたTシャツ、ポロシャツを展開していきます。将来的には学生がKマークTシャツを着て登校したり、近隣の方がスポーツフェスティバルにKマークポロシャツで参加してくださることもあるでしょう。スポーツを素材にして在学生、地域の方々に関東学院を応援する気持ちが育っていくことを願っています。

一般の学生・生徒にも メリットのある取り組み

スポーツ用品メーカーであるアンダーアーマーとタッグを組むことは、特定の運動部のみメリットがあることではなく、一般の学生にもメリットのあることです。例えば、スポーツフェスティバル会場へのアンダーアーマーの出

クラブ活動だけでなく、 教育・研究にも貢献する システムを

スポーツを基軸にしてスポーツそのものをマネジメントすることで、社会や地域とのつながりをより深いものにするだけではありません。アンダーアーマーとのパートナーシップから生まれたウェアやグッズによる資金を部活動だけでなく、学校全体の教育・研究の発展に貢献するという大きな構想もあります。生み出された資金によって教育・研究を充実させ、世界に通



陸上部・ラグビー部・野球部
ユニフォームデザイン案 (2016年3月現在)



関東学院大学 副学長 小山 巖也

一橋大学大学院商学研究所
博士後期課程単位修得退学
2001年より関東学院大学経済学部に着任
2014年関東学院大学副学長に就任

10年後、20年後を見据えた教育を行います

関東学院六浦中学校・高等学校は2013年に60周年を迎えました。その翌年に着任した黒畑勝男校長が着任早々提案されたのが、グローバル化する社会に対応するための教育の充実でした。グローバル人材育成プログラムについて、その発想の始まりから、今後の展開についてうかがいました。



関東学院六浦中学校・高等学校

校長

黒畑 勝男

1997年立命館慶祥中学校・高等学校(教頭)
2007年酪農学園とわの森三愛高等学校(副校長)
2014年関東学院六浦中学校・高等学校(校長)

アジアでの語学研修に 注目したきっかけ

グローバル人材育成プログラムの一環として、主にアジア諸国での海外研修を行う提案に当初、先生方や保護者の皆さんは驚かれたようですが、そこにはきちんとした裏付けがありました。以前、大分にある立命館アジア太平洋大学の高大連携の仕事に携わっていました。この大学は半数以上を世界80〜90カ国から来た留学生が占めています。民族衣装で出席する入学式はまるでオリンピックの閉会式のような雰囲気です。特にアジア諸国から来ている学生のエネルギーや意欲はたいへんなものです。自分の学びが、母国の発展に貢献するという明確な意志を持つ学生が多くいます。日本から学べ、日本との架け橋になる、という気迫で勉強をされていました。彼らの姿を見た時、逆に成長著しいアジア諸国で学ぶことがこれからの日本にとって重要ではないかと考えたのです。これがアジアへと関心が傾いていく一つのきっかけでした。2006年、トーマス・フリードマンが書いた

グローバル化を見据えた さまざまな研修

ASEAN諸国に積極的に関心を持つべきでしょう。ASEAN10カ国の人口は約6億2000万人、若者が多いのが特徴です。0才から14才までの未来社会を担う子どもたちの人口は、ASEAN諸国合計で1億7千万人。日本は1千7百万人です。こうした未来社会で日本の子どもたちは生きていくことになり、就職先も国内だけでなく、これまで以上に、海外にも目を向ける時代になります。課題は言語だけではなく、異文化の中での対応力、コミュ



2015年度希望者参加型海外研修(実施可能な対象学年)					
関東学院六浦中学校			関東学院六浦高等学校		
1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
夏期集中英語研修 国内ミニ留学体験コース			アメリカ短期研修 USAセミナー・キャリア直結型研修		
オーストラリア・ターム留学 州公立校			アメリカ UCテイビス 研修		
オーストラリア・ターム留学 私立校					
マレーシア・ターム留学(タイプ別2校)					
フィリピンセブ島 語学研修 (保護者参加も可、ただし語学研修を同様に受講します)					
カンボジア・サービス・ラーニング研修					
歴史探訪研修 -台湾-					
アラスカ研修					
保護者対象 教育視察ツアー					

は一般家庭にホームステイするプログラムもあります。そこでヒンズー教のお祭りや街のイベントに参加することで異文化体験ができるのが特徴です。マレーシアの学校については、私たちが行って学校や寮、教育内容をしつかりと見てきました。昨年からはじめたばかりですが、これまで9名が参加していて、そのうち1人は、そのまま1年間の留学にシフトしました。語学研修のもう一つのプログラムとして進行中なのが、ラグビーを通じたニュージランド留学です。クライストチャーチにあるラグビー強豪校と提携して、ラグビーを通じての留学と一般生徒の留学の準備を進めています。様々な国から生徒が集まってきています。2月末に提携の調印をします。提携の大きな特色は、1年間留学の学費が本校の授業料とほぼ同じという内容です。夏休みにネイティブの先生と少人数で英語漬けになるという、国内での4日間のミニ留学も用意しています。海外プログラムは費用がかかります。出来る限り費用を抑えて内容を充実し、安全であるのが本校のプログラムの大きな特色です。

語学教育と総合学習

中学・高校で海外研修に参加することは、言うまでもなくグローバルな考え方を身につける第一歩になります。今までは国境や社会制度などを意識して、日本と外国の関係を考えてきました。これからはいろいろな面で境がなくなっています。ボーダレス社会です。どのような環境の中でも頑張ることのできる人材を育てるのがこれからの教育の役割です。ですから、万能

感がまだ強く、自分の進みたい分野をまだ確定しきれない中学生の頃に異文化を知ること、それ以後に知るよりも人生の選択肢を広げることも役立つと考えています。グローバル化が進むほど、異文化とのせめぎあいや融合が起こります。生きていくためには、まず言葉が必要です。最低限、英語を話せないとスタートラインに立てません。そこで、本年度から中学1年生の英語授業の全てをネイティブの先生と日本人の先生による日本語をほとんど使わない授業にしました。中学入学後、7月まで英語の授業はリスニングとスピーキングのみです。ICTをフル活用してボキャブラリーも増やしていきます。試験も2学期まではリスニングだけです。英語に慣れること、スピーキングへの恐れを取り除き、英語嫌いをなくすのが目的です。2016年度入試からは英語入試をスタートさせました。国語と算数の他には英語1科目だけで、受験資格は英検3級以上であること。英検3級以上を持っている生徒やリスニングやスピーキングの力を持っている生徒を集めたクラスをつくり、彼らの英語の授業はどんどん進めようと考えています。英語教育に力を入れていきますが、将来的には中国語、タイ語、ベトナム語といったアジア言語を展開する学校にしたいと考えています。外国語の勉強も大切ですが、日本の文化もきちんと学ばなくてはなりません。また、論理的に書く国語教育は非常に大切だと考えます。中学2、3年生の総合学習授業は世界を学ぶプログラムにしました。横浜在住在勤の様々な国の方を招いて、それぞれの国情や日本にいる目的などを話していただきます。生徒たちは日本国内でも身近にグローバル化が進んでいることを具体的に実感できると思います。中学3年生の総合学習では、半年間にわたり週2時間の授業で世界の宗教を学びます。これは他校にはない授業だと思えます。世界のさまざまな宗教の特色を、例えば、何を尊んで何をしてはいけないのかを、調べ学習を組み込んで学び、レポート発表まで行っていきます。現在起きていることを歴史を踏まえて系統だてて学ぶことが大事だと考えています。内でも身近にグローバル化が進んでいることを具体的に実感できると思います。中学3年生の総合学習では、半年間にわたり週2時間の授業で世界の宗教を学びます。これは他校にはない授業だと思えます。世界のさまざまな宗教の特色を、例えば、何を尊んで何をしてはいけないのかを、調べ学習を組み込んで学び、レポート発表まで行っていきます。現在起きていることを歴史を踏まえて系統だてて学ぶことが大事だと考えています。

これからの中学・高校の教育に 求められること

これまでの社会は、単純に、点数を取り、偏差値が高ければ、安定した未来が獲得できると言えました。ところが、これからの子どもたちは、国内の教育環境、学習目標だけを考えていては不十分です。理系はともかく、文系の生徒は、日本語以外に最低2言語で直接コミュニケーションする語学力と、「積極的な協調性」を持たなければ十分に力を発揮できないでしょう。日本よりも伸びしろのある国で育ってきた子どもたちと対等に仕事しなければならぬのです。学校教育に必要なのは、子どもたちがこれから求められるであろう未来社会に必要な力と、学んでいくための情熱や好奇心を育てることだと考えています。10年後、日本や世界がどのようになっているかは誰にも分かりません。だからこそ、子どもたちには世界を見せ、体験させ、考えさせ、語学の必然性を知らせて、グローバル社会に対応する力の芽をつけさせることが大事な観点だと考えています。



学院のこんな人、あんな人

関東学院OBが熱血指導するふたつの部活動を紹介します。マーチングバンド部と女子ラグビー部は歴史こそ違いますが、生徒たちはそれぞれ頑張っています。

中高生が一緒に演奏し、行進するマーチングバンド。チーム全員心が一つになる瞬間は一生の宝物になります。



サックス奏者
関東学院中学校高等学校
非常勤職員(クラブ活動指導)
上杉 雄一 氏
神奈川県出身。関東学院中学校高等学校卒。
洗足学園音楽大学卒。
2004年から関東学院中学校高等学校
マーチングバンドの指導を担当。



1952年創部の関東学院中学校高等学校マーチングバンド部は、日本で最も古い歴史を持ち、様々な大会への出場、イベントへの参加など、幅広い活躍をしています。現在、マーチングバンド部を指導しているプロサックス奏者の上杉雄一先生もマーチングバンド部で演奏を

していたOBです。

マーチングバンド部の指導を始めたのは2004年からです。約6年前にメインの指導者になりました。母校へ恩返しをしたい気持ちもあってお引き受けしました。

上杉先生は信頼するスタッフやコーチチーム、顧問の先生にご協力をいただきながら指導を続けています。

「現在、基本の練習スケ

ジュールは生徒たちが考えて決めていきます。自主的に練習をして頑張った先には良い結果が待っています。音楽には必ず人間性が出てくるからです。先生にやらされているのと、自分たちでやっているのでは、演奏に違いが出るし、生徒たちの目の輝きも違います。臨機応変に対応する力、判断する力、私はこれを人間力と呼んでいます。チームとして演奏するマーチングバンドは人間力を養う手段の一つだと考えています。

マーチングバンド界はライバルが多く、その中で全国大会に出場して好成績を残すために必要なのは、関東学院らしさ、カラー、魅力を前面に出す演奏だと上杉先生は考えています。

「伝統校であることにプレッシャーもあります。しかし、最も大切なのは成績や結果ではなく、本番で日頃の練習の成果や実力をきちんと

と出すことです。演奏だけでなく、応援してくれる人に恥ずかしくないような立ち居振る舞いができること。ゴミを拾う、人に席を譲るといったことができることが大切です。こうした気持ちが関東学院らしい演奏になり、ひいては人間形成へとつながっていきます。」

2015年8月、横浜スタジアムでの「ゆず」のコンサートに出演して、約3万人の観客の前で演奏を行いました。また、12月のマーチングバンド全国大会の「高等学校の部・マーチングバンド部門(大編成)」では銅賞を獲得しました。

「大規模な大会だけでなく、地域のイベントにも依頼があればできるだけ参加しています。こうした場で日頃の練習の成果をお見せするの教育の一環だし、皆さんに喜んでいただいた感動は生徒たちの宝物になると思っています。」

Who's Who?



関東学院六浦高等学校1年 河部 春香 さん
関東学院六浦中学校1年 岡田 一那 さん
関東学院六浦中学校1年 野本 葵 さん

2015年4月、神奈川県内で初めてとなる女子ラグビー部が関東学院六浦中学校・高等学校に誕生しました。4人の女子生徒を指導するのは林広大教諭です。

女子ラグビー部の部員たちはラグビー大好きで練習熱心。

関東学院六浦女子ラグビー部として試合に出る日が楽しみです。

「県内の小学校でタグラグビーを経験して、中学・高校からラグビーをやりたいという女子生徒は以前からかなりの人数がいました。ところが、県内の中学・高校には女子ラグビー部がないため、ラグビーができる環境を求めて県外の学校へ進学したり、なかにはラグビーを辞めてしまいう生徒もいました。そこで、将来有望な選手を県内で育てる受け皿として、関東学院六浦中学・高等学校に女子ラグビー部をつくることになりました。」

2014年12月に女子ラグビー部の創部が決まり、翌4月に4人が入部しました。指導方法は男子生徒と同じで、練習も男子生徒と一緒に

「4人ともラグビーが大好きで、ラグビーができることが楽しくて仕方ない様子で、男子よりも熱心に練習をしています。」

パスを繋ぐ正確さとダッシュの速

ピードは男子生徒に負けてはいません。

「今後の課題は部員を増やして、関東学院六浦中学校・高等学校として試合に出ること。試合に出て動をつかめば必ず強いチームになります。日本の女子ラグビー界の将来のためにも、彼女たちには頑張ってもらいたいと思っています。」

河部春香さん 小学校3年生からタグラグビーを始めて、中学3年から地域のラグビースクールに入って週末に練習をしていました。今は毎日、男子生徒と一緒に練習をしています

が、彼らと練習することで私もレベルアップすることができました。私たちが頑張っている成績を残せば、部員や応援してくれる人も増えると思います。これからは頑張ってくださいね。

野本葵さん 父と兄がラグビーをやっているの、私も小さな頃から

ラグビーが大好きです。小学2年地域でラグビースクールに入りましたが、週末だけの練習ではなかなかうまくなりません。今は、部活動として毎日練習ができるので嬉しいです。しかも練習する学校のグラウンドは人工芝、時々練習に行く金沢文庫キャンパスは天然芝です。こんな素晴らしい環境で練習できるなんて幸せです。

岡田一那さん 小学校1年生からタグラグビーをやっていました。ラグビーの楽しさはいろいろありますが、私はタックルして相手を倒したり、敵の間を走り抜ける瞬間が大好きです。試合経験が豊富な大学のラグビー部の先輩が指導してくれるのも、この部の強みです。4月に新入生が入部して人数が揃ったら、関東学院六浦中学校・高等学校として試合に出たい。それが今の目標です。

関東学院ネットワーク

関東学院の卒業生が経営に携わっているお店にお伺いいたしました。今回は浅草の老舗すき焼き店と、横浜の地鶏料理店をご紹介します。



今半本店

住所／東京都台東区浅草1-19-7 ☎/03-3841-1411
営業時間／11:30～15:00 16:00～20:30 (20:00ラストオーダー) 定休日／火曜日(浅草の縁日、祝祭日などで変更あり)
<http://imahan-honten.co.jp/>

当主しか作れない割下は創業120年の歴史の味

東京・浅草。観光客で賑わう仲見世と交差する新仲見世アーケードにあるのが今半本店です。明治28(1895)年創業、121年の歴史を誇る老舗すき焼き専門店です。初代が大正6年に浅草に建てた店は関東大震災で倒壊、その後昭和3年に再興した店は、「今半御殿」と呼ばれた豪華なものでした。それも戦争で焼失、現在の店は昭和26年から

30年にかけて再建したもので、現在も手入れをしながら大切に使われ

ています。現当主の相澤二郎さんは5代目。店で使うすき焼きの割下は当主しかつくれない一子相伝の味です。最近は海外からのお客様も多く、持参の香辛料を振りかけて食べる人もいます。相澤さんは「楽しく食べていただくのが一番です。ああ、おいしかったとお帰りいただければ、それで私たちは満足です」と言います。

浅草生まれの相澤さんが、自宅のあった港区三田から京急線1本で通えると関東学院大学に入学したのは昭和48年。ようやく学生運動が下火になった頃でした。「初めて学校に行っ

た時、潮の香りがして、海水浴場に来たような気分になりました」。文学部社会学科に入学、クラブ活動は「旅と鉄道研究会」に入り、鉄道の旅を楽しんだと言います。「ゼミは社会心理学で、これも各地に調査に行きました。良い学校で友人や先生に恵まれました。特にゼミの折橋先生に可愛がっていただきました」。楽しい学生生活の思い出は尽きないようでした。



みやぎき地頭鶏 てげてげ

住所／神奈川県横浜市中区曙町1-4-127 ☎/045-252-8989
営業時間／18:00～2:00(火～土) 18:00～0:00(日祝)(ラストオーダーは閉店1時間前) 定休日／月曜日
<http://tege2.com/>

味に惚れ込んだみやぎき地頭鶏を召し上がってください！

横浜市営地下鉄伊勢佐木長者町から徒歩4分。イセザキモールと平行して走る国道16号線沿いにあるのが「みやぎき地頭鶏てげてげ」です。宮崎県のブランド鶏である地頭鶏(じとっこ)を炭火で焼いた籠焼きや白レバー、もも肉のタタキを始め、宮崎の料理と焼酎が楽しめる店です。「てげてげ」は宮崎の方言で「ほどほど」、「てきとう」の意



味ですが、炭火で地頭鶏を焼き上げるオーナーの吉田裕一さんの表情は「てきとう」どころか真剣そのもの。

「水道設備の仕事をしていたが、実家が寿司店だったこともあって、ずっと飲食の仕事をしたかと思っていました。42歳のときにこの店をオープンして9年目になります」と語る吉田さんは、横浜市出身の生粋のハマッ子。小学校から高校まで三春台の関東学院に通っていました。では、なぜ宮崎名産をメインにした店を出すことに？

「以前、宮崎に行ったときに食べた「じとっこ」がとても美味しかったんです。店を出すな

ら宮崎の地鶏を使おうとその頃から思っていました」。

中学校高校時代はバレーボール部で活躍した吉田さん。6年間に培われた先輩後輩や同級生との繋がりは今も宝物だと言います。

「店には宮崎や九州出身の方や、出張で横浜に来るたびに寄ってくる方もいますが、関東学院の先輩や後輩も来てくれます。先日は小学校の同窓会を店で開いてくれました。皆さんが応援してくれるので心強いし、頑張ろうと思います」。



広報から

2016年は、「未来ビジョン」がいよいよ本格的にスタートします。本誌でもご紹介している4つのビジョンの実現に向けて、ロードマップも含めた「未来ビジョン(大学編)」の公表と、いくつかの具体的な施策が走りはじめます。

未来ビジョンのひとつとして、グローバル化やICTの発展、人口減少社会の到来に伴う社会の変革を見据え、企業と連携したあたらしい教育・人材育成のかたちを目指す経営学部と、神奈川県内の10の自治体との連携によって、法学分野の知識を活用して地域再生・地方創生に貢献できる人材育成を目指す法学部 地域創生

学科の2017年4月開設に向けた動きがスタートします。

この他にも、サステイナブルなカレッジ・スポーツのかたちを目指した株式会社ドームとの連携や、学食機能を強化した新棟の建設など、あらたな取り組みが次々とスタートしています。現在策定が進行している大学以外の学院各校の未来ビジョンと合わせ、これからの関東学院にぜひご期待ください。

関東学院 広報企画課
(045)786-7006 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

関東学院を卒業した国際人 Vol.5



プロラグビー選手

稲垣 啓太 氏

1990年、新潟県生まれ。2009年新潟工業高校卒業後、関東学院大学に入学。2013年大学卒業後、パナソニックワイルドナイツに加入。同年のシーズンの新人賞、ベストフィフティーンに輝く。2014年日本代表入り。2015年世界最高峰のスーパーラグビーに所属するレベルズに加入。同年に開催されたラグビーワールドカップ2015では全4試合に出場し、プロップとして日本代表の躍進に貢献した。



過去を振り返らず、2019年を見据えて

ラグビーを始めたのは中学3年生のときで、兄の影響です。高校時代には、U20(20歳以下)日本代表などにも選ばれました。海外遠征などの経験を積む中で、ただラグビーが好きというよりも、次の段階に進むためには何をすべきかといったことを意識するようになりました。高校在学中の2009年、大学選手権の決勝で関東学院大学が早稲田大学を降した試合を観戦したことが、関東学院大学への進学を決めた理由の一つです。

大学時代のことでバツと頭に思い浮かぶのは、あの天然芝のグラウンドです。素晴らしい環境で練習して

いたんだなど、今にして思います。印象に残っている試合は2011年の大学選手権の準々決勝、早稲田大学との試合です。歴代の先輩方も、早稲田大学に対して並々ならぬ思いを抱いていました。それだけに、接戦の末に勝利を収めることができたときの喜びは格別でした。翌2012年、4年生になった僕はラグビー部の主将を務めました。その年、大学ラグビーリーグの2部に降格してしまいました。自分の至らなさを思い知り、とても悔しい思いをしました。



©JRFU 2015, photo by H.Nagaoka

僕も。大会前に掲げたベスト8進出という目標を達成できなかったからです。

2019年には、日本でラグビーワールドカップが開催されます。あれだけ練習しても叶わなかったベスト8に進出するためには、自分の能力をどう高めればいいのか。今はそういうことを考えながら、日々ラグビーと真摯に向き合っています。

海外で活躍しているこのページに登場してくれる卒業生をOLIVE-SPIRITでは募集します！
自薦、他薦を問いません。
kouhou@kanto-gakuin.ac.jpまでご連絡ください！



小田原市


関東学院大学

☎ 045-781-2001 (代)

- 湘南・小田原キャンパス
- ☎ 0465-34-2211
- 法学部
- 大学院 (法学研究科)

東名高速道路

東海道新幹線

横浜市

関東学院中学校高等学校

☎ 045-231-1001

関東学院小学校

☎ 045-241-2634

関東学院のびのびのば園

☎ 045-845-0876

関東学院大学

☎ 045-781-2001 (代)

- 横浜・金沢文庫キャンパス
- ☎ 045-786-7179
- 社会学部 / 国際文化学部
- 大学院 (文学研究科)

鎌倉市

逗子市

葉山町

関東学院大学

☎ 045-781-2001 (代)

- 横浜・金沢八景キャンパス
- ☎ 045-786-7002
- 人間共生学部 (2016年4月スタート)
- 経済学部 / 理工学部 / 建築・環境学部
- 人間環境学部 / 教育学部 / 栄養学部 / 看護学部
- 大学院 (経済学研究科 / 工学研究科)
- 法科大学院

関東学院六浦中学校・高等学校

☎ 045-781-2525

関東学院六浦小学校

☎ 045-701-8285

関東学院六浦こども園

☎ 045-781-0170

Contents

- P.1 未来ビジョン
- P.4 新棟建設について
- P.5 それぞれの展望
- P.7 カレッジスポーツのこれからの形
- P.9 グローバル人材育成について
- P.11 Who's Who?
- P.13 関東学院を卒業した国際人
- P.14 関東学院ネットワーク

学校法人

関東学院

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

法人事務局 ☎045-786-7028 (代)

<http://www.kanto-gakuin.ac.jp/>